

クラヴァットに関する稀観書

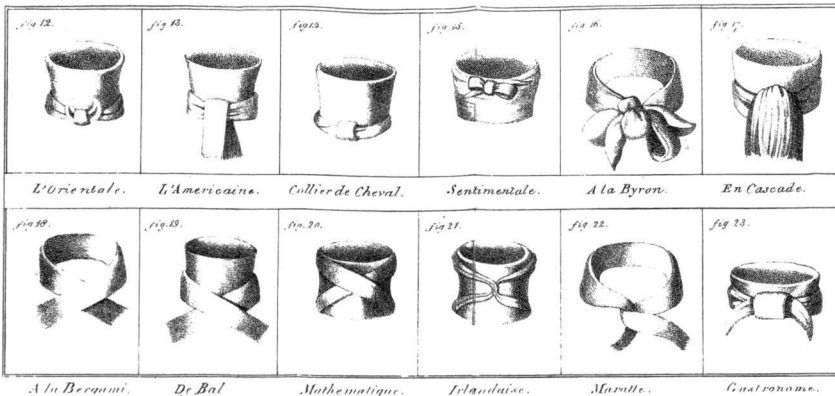
講師（西洋服装史担当） 神部 晴子

クラヴァットは、19世紀初期の「ダンディ」と言われた洒落者達の念入りな身だしなみのなかでも、大変重要な役割を持ったアクセサリーのひとつである。

近代になって、男性の服装はそれまでの華やかさを失い、形の上では固定化し、色彩の面でも一様に地味な黒や紺などが好まれるようになる。その背景には、18世紀末期にイギリスで生まれたダンディズムという美意識が反映している。当時、「ダンディの神様」と言われたジョージ・ブライアン・ブランメルをはじめとする洒落者達を惹きつけたものは、その姿、立居振る舞い、会話術であった。中でも、その服装は重要な要素のひとつであり、クラヴァットには多大な労力を費やしたことで知られる。

クラヴァットが当時、男子服の中でもとりわけ関心を引く部分であったことは、クラヴァットに関する出版物が刊行されていることから明らかである。イギリス、フランス、イタリア、アメリカ等で発行され、中には何版も重ねたものが少なくない。それらのほとんどはクラヴァットの機能を強調し、幾通りかの結び方を列挙したものである。今回は、その極めつけともいえる2冊の文献を紹介する。

Plate C.



「クラヴァットの結び方の技術」より
左上から、オリエンタル・クラヴァット、アメリカン・クラヴァット、馬の首輪型クラヴァット、センチメンタル・クラヴァット、バイロン風クラヴァット、滝状クラヴァット。左下から、ベルガミ・クラヴァット、舞踏会クラヴァット、数学クラヴァット、アイルランド・クラヴァット、マラータ・クラヴァット、美食家クラヴァット。

一冊は、1818年、ロンドンで刊行された著者未詳の『ネッククロスィターニア』(Neckclothitania or Tietania; being an essay on starchers) (K383.3-N) である。縦長の小型判(17cm×10cm)で、38ページから成る。序文を含め14ページに渡って、クラヴァットの重要性について触れた後、詳細な説明とともに12種類の結び方を紹介し、巻末では、9ページに渡りクラヴァットが完成した時の効果を述べている。

もう一冊は、ル・ブラン(Le Blanc)による『クラヴァットの結び方の技術』(The art of tying the cravat; demonstrated in sixteen lessons. London, E. Wilson, 1828) (K383.3-L) である。本書に関する著者等については、本館発行の『続・西洋服飾関係欧文文献解題・目録』(1990年)の中で紹介されているので、ここでは繰り返さない。両者とも、度々引用される貴重な史料である。

クラヴァットは男性にとって、当時、いかに重要であったのだろうか。ル・ブランは冒頭で次のように定義づけている。「クラヴァットは単なる装飾品ではなく、男性の家柄や教養を示すひとつの紹介状である」と。確かにクラヴァットを見れば人間の社会的地位、育ち、政治的意見までひと目でわかると当時は考えられていた。なぜなら、定

型化した男子服において、クラヴァットは着用者自身の手で完成され、その効果が最も端的に現われる部分であったからである。その頃のクラヴァットは現在のように縦に細長いスタイルではなく、スカーフ状のものを首に巻き付ける形式をとっていたので、おのずと着用者の独創性がそこに現われてくる。そしてル・ブランは、「社会におけるクラヴァットの重要性」を、約2ページに渡り述べている。

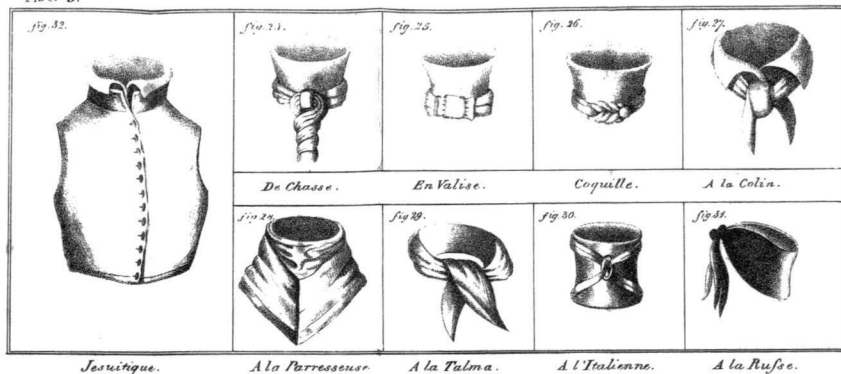
次に、クラヴァットの結び方には、それぞれユニークなネーミングが付けられている。

例えば、オリエンタル・クラヴァットは、結び目の先端を三日月型に仕上げ、それがトルコ風のイメージからそう呼ばれたのではないかと思われる。流れるような水を連想させる滝状クラヴァット、あるいは噴水クラヴァット。幾何学的な外観を持ち、正面にはXの文字の形を作り上げる数学クラヴァット。両脇にベルトの付いた旅行用バッグに似た旅行かばん風クラヴァット、巻き貝の形をした貝殻風クラヴァットなどがある。また、パイロン風クラヴァットと呼ばれるスカーフ状に結ばれたものもある。減多にクラヴァットをすることがなかったといわれる詩人パイロンが唯一好んだスタイルである。彼が世を去った1824年、クラヴァットに関する論文の中でパイロン風という名で浮上した。この緩やかで一見甘さのあるパイロン風は、彼のロマン主義的な気質にぴったり合っていたのである。ロマンティック・クラヴァットとも呼ばれ、ゆったりして旅行に適していること

から旅行用クラヴァットとも呼ばれた。また、当時イギリスではウォルター・スコットの小説がベストセラーとなり、そのヒロインを真似た服装が流行していた。オズバルテストン・クラヴァットも彼の作品に登場する主人公の名前を使ったものである。この他、ナポレオン・クラヴァットや、当時フランスで活躍していた俳優の名から採ったタルマ・クラヴァットなどがある。アメリカ人が発案したアメリカン・クラヴァットは、別名独立クラヴァットと呼ばれた。だが、皮肉にも首が完全に締め付けられ自由な動きが妨げられると言われた結び方である。更に17歳から27歳までの特に顔立ちの整った若者向けのセンチメンタル・クラヴァットや、喉の部分をあまり締め付けない美食家クラヴァット、最も簡単に仕上がる怠惰クラヴァットなどがある。以上は、ほんの一部であるが、名称の由来についてはつきりしていないものも少なくない。

ル・ブランは次のようにも述べている。「集団の中に居る時、周囲の目はクラヴァットの結び方に引きつけられる」。このように、結び方に関しては並々ならぬ努力がなされたことが伺える。鏡の前でひたすら熱心にクラヴァットを結ぶ一人のダンディの足元には、失敗した皺だらけのクラヴァットが山のように積まれていた、という当時の逸話は度々語られる。1830年頃の『身だしなみの術』(Un art de la toilette)では、72通りの結び方が列挙されているが、ここまでくると一種の遊びとなり、そこにはクラヴァットの結び方の限界が感じられる。

Plat. D.



「クラヴァットの結び方の技術」より左から、イエズス会風、左上から狩猟クラヴァット、旅行かばん風クラヴァット、貝殻風クラヴァット、コラン・クラヴァット。左下から、怠惰クラヴァット、タルマ・クラヴァット、イタリアン・クラヴァット、ロシア風クラヴァット。